夕刊フジ　2022年9月17日（16日発行）

ニッポン臨終図巻

ドクター和の

㉗② 俳優　古谷一行さん

我が子に生き抜く姿を見せ…

僕には息子がいません。もしも自分が死んだときに、息子にこんなことを言われたら最高に幸福だろうなと思いました。

《親父お疲れ様　最後まで本当に勇敢に闘い抜いたね　バチくそ格好良かったよ　俺にはまだやりたい事も観たい景色も山程ある。だからそっち行くのはちょと先になると思うんよな　役者仲間達と楽しくやって待っててよ　親父の息子にしてくれてありがとう　生まれ変わってもイカした俳優とイカしたバンドマンの親子になろぜ　愛してるよ　じゃね》

長男でDragon Ashのボーカル・降谷建志さんがインスタに綴った言葉です。息子から「かっこいい」「生まれ変わってもまた親子に」と言われるなんて、本当に仲が良かったのですね。

俳優の古谷一行さんが、8月23日に都内の病院で亡くなりました。享年78。死因は明らかにされていませんが、所属事務所の発表には、〈病克服後、次なる挑戦に向けて、家族の見守りと共にトレーニングに通う日々を送っておりました矢先、この度の訃報となる予期せぬ出来事に見舞われてしまいました〉

とあり、突然の旅立ちだったようです。しかし、古谷さんは長らく闘病中でもありました。

一部報道によれば、2011年、67歳のときに肺がんが発覚。翌年に手術でがんを摘出しています。しかしその3年後には、脳への転移が見つかり、このときは放射線治療で乗り越えたようです。その後、今度は胃がんが見つかり、胃の全摘手術をしていました。つまり古谷さんは、10年以上も、がんと闘い続けていたようです。

国立がん研究センターは昨年、過去最大である約24万人の患者の大規模データに基づいた、15種類のがんでの「10年生存率」を初めて発表しました。

それによると、がん全体での10年生存率は59・4％、つまりがんと診断されても約6割の人が10年後も生きられるということです。もっとも生存率の高いがんは前立腺がんで98・7％、その次が女性の乳がんで87・5％。

肺がんの場合、非小細胞肺がんで34・5％、小細胞肺がんでは9・1％となっています（いずれもステージ1～4全体の数字）。

先日、この連載で近藤誠さんの訃報を書きましたが、「がんと闘うな」はやはり旧時代の話。今は「賢く闘い、共存する時代」であると実感します。

先の降谷さんのコメントも、10年以上の父の闘いを知っているからこその言葉でしょう。

生き抜く姿を見せることは、親が我が子にできる最後のプレゼントとなるのです。

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。